

小林家の歴史

奥出雲の刀鍛冶・小林家は、たたら製鉄所の大鍛冶場で鍛冶をしていた小林才兵衛（1822 年没）を祖とする。日本は 1860 年代から西洋の技術を輸入するようになり、鉄の需要が急増したため、孫の小林松左衛門（1846 年生まれ）が独立して製鉄所を設立した。しかし、たたら製鉄は輸入された新しい反射炉との競争に苦戦し、松左衛門はすぐに廃業を余儀なくされた。

松左衛門の孫である小林大四郎（1903-1976）は、一族で初めて刀鍛冶の修行を積んだ。広島県で学んだ後、1942 年に奥出雲に戻り、軍用サーベルを製造する鍛冶場を開いた。実業家の小林家にとって不運だったのは、1945 年の第二次世界大戦終結後、刀剣の製造は禁止されたことだった。

やがて禁止令が改正され、美術品としての刀剣の製作が合法化された。大四郎は 1954 年に刀剣製作の許可を得て、京都の月山貞一（1907-1995）に師事した。月山貞一は後に人間国宝に指定される名工である。大四郎は名工になり、1965 年には日本美術刀剣保存協会の第 1 回作品展に出品された。大四郎の 3 人の息子たちも後を継ぎ、奥出雲を代表する刀工となった。